

| | |
|--------------|---|
| Title | Violence and Writing in Hemingway's Literature |
| Author(s) | 久保, 公人 |
| Citation | 大阪大学, 2012, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/59123 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

| | |
|------------|--|
| 氏名 | 久保公人 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（言語文化学） |
| 学位記番号 | 第 25060 号 |
| 学位授与年月日 | 平成24年3月22日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻 |
| 学位論文名 | Violence and Writing in Hemingway's Literature (ヘミングウェイ文学における暴力とライティング) |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 渡邊 克昭 (副査) 教授 貴志 雅之 教授 堀内 研二 世界言語研究センター准教授 畑田 美緒 准教授 中村 未樹 |

論文内容の要旨

暴力的記憶を言語でとらえることによってその再現前を目指す作家ヘミングウェイのライティングに通過儀礼並びに暴力浄化の儀式的な役割を認め、その書き込まれるべき対象である暴力の多様性と変容を追いながらヘミングウェイ文学を論じる。また、ヘミングウェイのライティングを芸術的手段および儀式的手段という両側面から図式化することで、芸術的表象の追求がこの作家にとって暴力浄化に至る通過儀礼と一体化したプロセスであることを示し、このイニシエーションと浄化からなる儀式的ライティングと作中人物らとの関わりを軸に各作品を読み解いていく。暴力的記憶を書き込む必要に迫られた作中人物たちをヘミングウェイ・ライターと名づける。章が進むに連れて、本稿におけるライティングの定義は文字通りの書き行いに留まらず、経験の言語化一般にまで押し広げられる。ペンの概念もまた、その言語化のプロセスを遂行するのに要するファリックな力の象徴としての色合いを濃くする。

序章 ペンは隠喩的なペなりうるか？

本論に取り掛かるための露払いとして、まずはヘミングウェイ批評において近年盛んなジェンダー批評から距離を置くことを宣言する。ジェンダー批評はそれ自体として成果をあげているものの、作家個人の幼少期のトラウマとそれに伴う性的嗜好へ固執するあまり、ヘミングウェイ批評をテキストの精査に重きを置く作品研究から遠のかせてしまった。とはいえ、男性性／女性性の二項対立からファルス／虚勢という二項対立へと思考の軸足を移すきっかけを与えてくれたのは他ならぬジェンダー批評である。儀式的ライティングの担い手として書き手が言語芸術を生み出す力は、その心的状態がファリックな方向へ向かうほど強く、虚勢的な方向へ向かうほど弱くなる。

第1章 ライティング、ファイティング、パーズィング

作家としての死、そこで失われるものは何か。「キリマンジャロの雪」(1936)では、作家ハリーの創作力の衰えが拳闘家の身体能力のそれに譬えられる。だが、書く行いが男性的な力を要するもの、女性的なものと同様に置かれるものだと考えてはならない。ハリーが失った才能はファリックな力に

依存するものであり、それが性別の境なく人生の通過儀礼的な過程で必要とされる力であることをカール・エピのファリック・ウーマンという概念を用いて説明し、書く力をなくした作家の置かれた状態がファリックなものとは対極の虚勢的なものであることを示す。ヘミングウェイの闘牛論をその著書『午後の死』(*Death in the Afternoon* 1932)に探ると、そこにはルネ・ジラルールが人類学的見地から説く、悪しき暴力を犠牲者に体现させて聖なるものへと転換させる供儀のメカニズムと同様のものが見られる。この作家にとって文学作品を書くことが闘牛士の身振りを紙上で行うことであり、それが暴力的記憶を言語でもって表現し、良き作品へと昇華させる儀式だとする論を提起する。

第2章 サバンナの偽マタドール：フランシス・マッカンパーのお粗末なイニシエーション

前章に続いて、供儀としての闘牛の通過儀礼的側面を『午後の死』で検証し、闘牛士に求められる男性性が虚勢と対極にあるファルスのな力にあたることからこれをジェンダー的な意味での男性性と区別して「イニシエーション・マスキュリニティ」と呼ぶことにする。ヘミングウェイの主人公がイニシエーション的な場面で求められるのがこのファルスのな力であることを『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls* 1940)の一場面を例に取って確かめる。また、「フランシス・マッカンパーの短くも幸福な生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber” 1936)に描かれる水牛狩りの一幕は、ヘミングウェイ文学におけるイニシエーションの性格をその失敗例を通して逆説的に教えてくれるだろう。

第3章 思考と苦悩：無秩序に抗う精神療法的格闘

ヘミングウェイ文学に溢れかえる暴力は理不尽であり、対象を選ばず、はたまた伝染性を持ち、死はもとより、怪我、病、死産等々の多様な形をとって現れる。こうした暴力の目撃者または受難者である作中人物らは己の抱え込んだ暴力的記憶を書き払う必要に迫られている。イニシエーション・マスキュリニティを要する通過儀礼として「ビッグ・トゥー・ハーテッド・リバー」(“Big Two-Hearted River” 1925)でニック・アダムスが行う鱒釣りを考察する。前章で闘牛に認めたものと同じ儀式的役割をニックの鱒釣りに探る過程で、彼の少年時からの暴力との遭遇の履歴を他の5つの短篇に迫うとともに、彼にとって書くことがそれら忌まわしき記憶を祓う手段となっていることを確かめる。ニックの内向きの心的傾向は暴力的記憶に苛まれるヘミングウェイ・ライターの典型として示すことができる。トラウマ的記憶から逃避するとともに、それらの記憶を書き祓うための儀式をも放棄したニックが行う、自身の精神浄化を意図した川釣り、実際にはイニシエーション的な格闘に耐えうるファリックな力を要する「精神療法的格闘」としての書き祓いの儀式の代替となっていることを論証する。

第4章 幼児退行した男—精神療法的格闘のテキストとしての『武器よさらば』

『武器よさらば』(*A Farewell to Arms* 1929)のテキストは、主人公である語り手フレデリック・ヘンリーの精神療法的格闘の言語的生産物であり、そこには先に述べた形で多様な暴力が描かれる。フレデリックの語りは、ある暴力の原則が存在し、その原則が支配する世界が人間をもてあそぶ様を浮き彫りにする。前線で深手を負うのを境に、ファリックな状態とは反対の虚勢状態へと退行していくフレデリックのメンタリティが前章で論じたニックのそれと類似していることを指摘しながら、ニックが川岸に立てるテントの持つ外的世界から守られた結界としての役割と、外部の暴力溢れる世界からフレデリックを守るシェルターを提供する恋人キャサリンの役割とが符合することを示す。このことは、フレデリックとキャサリンの関係が、前者が後者に依存する、いわば母子関係にあることを示唆する。また、「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp” 1925)でニックが立ち会う帝王切開手術と、キャサリンが受ける帝王切開とを文化人類学的な視点を交えて比較対照しながら、キャサリンの死が暴力の原則に従って引き起こされる様を論じる。自身のトラウマ的経験を回顧的に言語化するヘミングウェイ・ライター、フレデリックのファルスのな力の源が暴力との遭遇により引き起こされた彼の虚勢状態にあることが逆説的に示される。

第5章 果たしえない儀式—ジェイク・バーンズの呪われたPen(is)

『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises* 1926)もまた、『武器よさらば』と同じく主人公兼語り手による精神療法的格闘の言語的生産物である。しかしながら、ジェイク・バーンズには書き祓いの儀式の完遂が見込めない。というのも、言語テキストを生み出すファルスのな力は、彼の場合、男性器に負った回復不可能な戦傷の影響を免れないからだ。ファリックな力を無性的なものとする本稿の前提に反するこの複雑な状況は、どれだけ言葉を書きやそうとも己の苦悶が言語芸術へと昇華されることのない負の循環にジェイクを閉じこめる。ジェイクの性的不能は、儀式の担い手としての彼の不能と結び付く。闘牛場における闘牛士ロメロのパフォーマンスは、ジェイクの苦悶を「代筆」で書き祓うことで一時的にしろ彼の不能を補う。牛に剣が突き立てられる瞬間に、不能のヘミングウェイ・ライター、ジェイクは己を不能ならしめる暴力の追放と男性機能の回復を感得するのである。この論を展開するための地ならしとして、本章はライティングと闘牛の間に共有される芸術的特性を探ることから始め、言葉でとらえた事象の現前性と永続性を目指すヘミングウェイの文学的技法、「冰山理論」に基づくライティングが、ロメロの闘技場での勇姿に体现されていることを論じる。

第6章 表象の限界を表象する—『老人と海』に見る作家の報酬

5章で扱ったヘミングウェイの芸術的技法をさらに掘り下げ、テキストに書かれた現象を、直接に立ち会ったものとして、あるいは自分自身の経験として読み手に感得されることを目指したヘミングウェイ的リアルをウォルター・ベンヤミンのアウラという概念を手がかりにして考察する。明らかになるのは書き手が己の情動を読み手に手渡す手段としての言語芸術に内在する暴力は、十全たる意味の現前とその永続を阻む。前章で、ジェイクとプレットの間に存在する越えられない距離はヘミングウェイ・ライターが直面する表象の不可能性に重ねられた。本章では、この表象の不可能性を『老人と海』(*The Old Man and the Sea* 1952)にて、老漁師が巨大なマカジキを持ち帰る距離に重ねて論じる。ヘミングウェイ・ライターたちが経験する創作時の苦悩を体现したものとして、鮫によって解体されていくマカジキを守る老漁師サンチャゴの奮闘をとらえるとき、この物語のテキスト自体が老年に差しかかった作家ヘミングウェイの再帰をかけた精神療法的格闘として読める。

結論 越えられぬ距離を超えて

前章で扱った表象の不可能性を引き起こす暴力、これをポスト構造主義的にとらえるならば、「差異の戯れ」といえるのではないだろうか。己を虚勢状態に陥れる暴力的記憶を書き祓うという作家の欲望を、この言語に内在する暴力は去勢してしまう。だが一方で、去勢に追い込まれた精神状態こそがファリックな精神を要求する儀式的な執筆行為を動機付けだともいえる。文学界のチャンピオンとして君臨するという、作家ヘミングウェイの欲望を阻むのも同じ記号論的アポリアである。この欲望は、偉大な作家として自身を世界というテキストへ書き込むことに他ならない。作家自身が「ヘミングウェイ」という記号表記にふさわしい記号内容となるとき、偉大な作家ヘミングウェイという意味が世界というテキストに充溢する。それを成し遂げるには紙の上で意味の現前を成し遂げねばならない。

論文審査の結果の要旨

本論文『ヘミングウェイ文学における暴力とライティング』は、「書くこと」に対する作家の自意識のテキストへの反映という、ヘミングウェイ批評においてこれまでほとんど等閑視されてきたメタフィクショナルな視座より、彼の文学の特質を根本的に問い直した労作である。ヘミングウェイが「書くこと」を通じていかに暴力的記憶を現前させることにより、トラウマを儀式的に克服しようとしてきたのか、主要作品の綿密な分析を通じて

丹念に辿るとともに、そうした作家の試みの限界をも炙り出すことに成功している。昨今のヘミングウェイ批評においては、作家個人の幼少期のトラウマに着目し、ジェンダー論の立場から彼の両性具有的性質を暴き立てようとする批評が大きな影響力をもってきたが、本論文はそうした先行研究の枠組みとは一線を画し、メタフィクショナルな準拠枠を提起することにより、作家の営みに対する彼のストイックな眼差しが、理想化された男性性への眼差しといかに不可分の関係にあるかを鮮やかに浮き彫りにしている。

本論文において、暴力的記憶を言語化することにより除去する必要に迫られた作中人物は、ヘミングウェイ・ライターと名づけられ、彼らの困難を伴うライティングの身振りは、文字として定着する場合も、そうではない場合も、暴力浄化をもたらす通過儀礼と一体化した儀式的なプロセスとして捉えられる。本論文のキー概念をなす「ファルス」的状態とは、暴力が支配する虚無的世界にあって、そのような儀式的ライティングの担い手である書き手が、言語芸術を通じて聖域としての「真実の瞬間」を十全に現前し、それに到達できる理想的な状況として定義されている。逆に、書き手がそのような「真実の瞬間」に到達することができず、虚栄心から表面を取り繕ったり、例え達成されたとしても再び虚無に回収されたりしてしまうような場合は、「去勢/虚勢」的状態として捉えられている。これらの準拠枠の論拠となっているのは、メタフィクショナルな要素が随所に散りばめられたヘミングウェイの闘牛論『午後の死』(1932)である。自らの創作技法の範を闘牛に求めた作家ヘミングウェイにとって、真正な文学作品を書くことは、真正な闘牛士の身振りを紙の上に再現することに他ならなかったという主張は、『午後の死』が単なる闘牛論ではなく、「書くこと」についての作家のマニフェストでもあったということに鑑みれば納得がいく。このような仮説に基づき本論文は、ヘミングウェイが紡ぐテキストには、暴力を聖なるものへと転換させる供儀のメカニズムがメタフィクショナルなかたちで作用していることを、『われらの時代』(1925)、『日はまた昇る』(1926)、『武器よさらば』(1929)、「キリマンジャロの雪」(1936)、「フランシス・マッカーバーの短くも幸福な生涯」(1936)、『誰がために鐘は鳴る』(1940)、『老人と海』(1952)といった主要作品の批評を通して、

実証的に描出することに成功している。

本論文の優れた点としては、以上述べたような着想が斬新かつ独創性に富んでいるのみならず、厚みのある考察が随所に挿入され、なおかつ論理的に論が展開されていることが挙げられる。思考の跡を窺わせる綿密な論述とともに、論拠として提示されるテキストや批評文献からの引用も適切に選定されており、序論から結論へと導かれる議論には首尾一貫した説得力が備わっている。さらに特筆すべきことは、本論の考察の大半が、暴力や虚無を首尾よく書ききることのできた書き手ではなく、むしろそれを達成し損ねたふがいない書き手への分析に充てられていることである。このことは、自らの作品に「ファルス」的完璧さをストイックに追求し続けたモダニズム作家ヘミングウェイが、神話的な自画像を突き崩すメタフィクショナルな意味での去勢不安に脅え続けてきたという鋭い洞察に基づいている。このことによって逆照射されるのは、言葉によって「真実の瞬間」を余すところなく把持するという「書くこと」への潔癖なまでのこだわりと表裏一体をなす「書けぬこと」への不安こそが、彼の文学にインスピレーションを与えてきたという逆説である。このような知見は、戦争体験による虚無への怯えと、その克服という二項対立の図式に依拠してきた従来のヘミングウェイ研究にパラダイム転換を迫るポスト構造主義的な新たな批評の地平を提示している点において、大いなる意義を認めることができる。

以上の評価を踏まえ、論文審査においては、審査委員から次のよう質疑がなされた。立論するにあたりフェミニズム批評への目配りが必ずしも十分ではなかったのではないか、ヘミングウェイの自殺に触れた結論部分において展開される議論はやや平板ではなかったか、作家と登場人物の関係をペルソナとの関係においていかに捉えるのか、日本語要旨の記述に改善の余地があるといった点である。

しかしながら、これらの問題点は、本論文の学術的価値を決して損なうものではない。ヘミングウェイ研究の意義を根源的に問い直すのみならず、その新たな方向性を模索するものとして、本研究は関係学会においても注目されてきた。研究業績に示されるように、本論文の一部が日本アメリカ文学会関西支部の査読付きの機関誌に既に掲載されており、

日本ヘミングウェイ協会、日本アメリカ文学会全国大会等における口頭発表においても、高い評価を得てきたことは何よりもその証左となろう。

なお本論文は、各審査委員が一致して認めるように、こなれた達意の英語で執筆されており、国際的なヘミングウェイ研究に資するところが大きいと判断される。

上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。